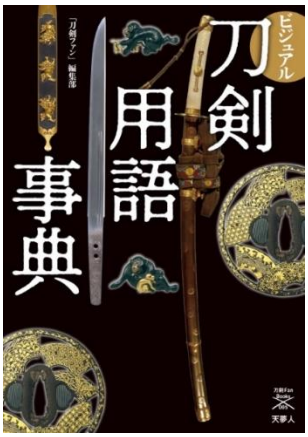
Temjin
An impress Group Company

各　位

2022 年 9 月 20 日
株式会社天夢人

小柄とは？帽子とは？五箇伝とは？
日本刀に関する用語を写真や図版を交えてわかりやすく解説
『ビジュアル刀剣用語事典』発刊

インプレスグループで鉄道・旅・歴史メディア事業を展開する株式会社天夢人（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：勝峰富雄）は、2022 年 9 月 20 日に、『ビジュアル刀剣用語事典』を刊行いたしました。

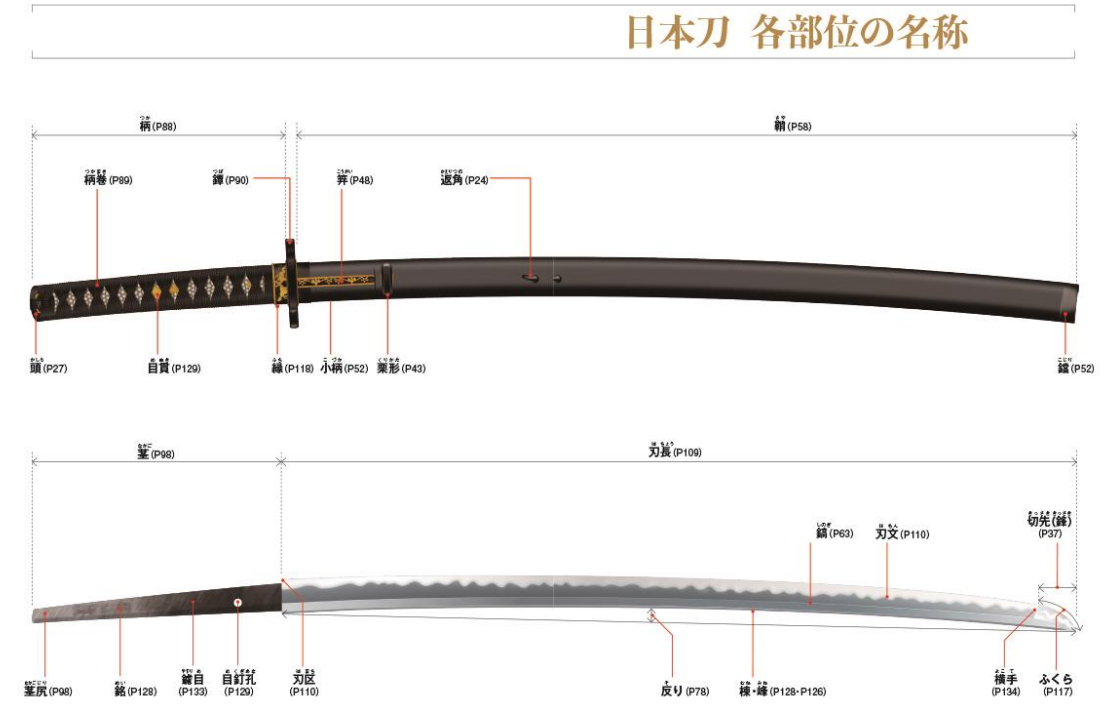


太刀、刃文、切先、帽子、刀装具など日本刀に関する専門用語や慣用句などをまとめた日本刀の用語事典。写真やイラストなどを織り交ぜわかりやすく解説。基本的な刀剣用語、約 1600 語を 50 音順で解説し、さらに正宗、景光、虎徹など主要刀工なども紹介しています。巻末では「相鎚を打つ」「一刀両断」「元の鞘に収まる」「切羽詰まる」「白羽の矢が立つ」など、刀剣用語から派生し日常でも使われるようなさまざまな慣用句やことわざについても解説。刀剣用語を知ることで日本刀の基礎知識と理解をより深められる一冊です。

【目次】
・日本刀　各部位の名称
・ビジュアル刀剣用語事典（50 音順）
・主要刀工名鑑（50 音順）
・刀剣用語の慣用句・ことわざ（50 音順）

＜掲載刀剣用語例＞
合口拵／藍鮫皮／相槌・相鎚／葵形鐔／葵拵／葵紋／青江／青江帽子／青貝／青金／竹刀／障泥形鐔／赤鰯／赤木柄／赤金／赤坂鐔／赤羽刀／上太刀／足／足緒／足金物／足金／足革／足長丁子／足間／当たり／後樋／後彫／後銘／虻の目／油染み／油焼入れ／天叢雲剣／雨覆／阿弥陀透／阿弥陀鑢／綾杉肌／綾小路／荒仕上げ／荒沸／新刃銘尽／合わせ鉄／合わせ金／粟田口／居合／居合抜／家彫／庵棟／沃懸地塗／烏賊の頭／厳物造太刀／猪首切先／石気／石突／石目地／石目地塗／出羽鋼／板鐔／板目肌／一重鎰／一乗式木瓜形鐔／一の足／一の責／一の胴　ほか

＜掲載慣用句・ことわざ例＞
相槌を打つ／雨が降ろうが槍が降ろうが／一番槍／一刀両断／一本槍／いぶし銀／大袈裟／折紙付き／急場凌ぎ／極め付き／鯉口を切る／鞘当て／地金が出る／鎬を削る／自腹を切る／正真正銘／白羽の矢が立つ／真剣勝負／助太刀／切羽詰まる／反りが合わない／太刀打ちできない／単刀直入／付け焼刃／鐔迫り合い／剣の刃を渡る／鉄は熱いうちに打て／伝家の宝刀／土壇場／頓珍漢／抜き打ち／抜き差しならない／火花を散らす／懐刀／弁慶に長刀／矛を収める／身から出た錆／目抜き通り／元の鞘に収まる／諸刃の剣／焼きが回る／槍玉に上がる／横槍を入れる／両刀使い　ほか



あ

合口拵［あいくちこしらえ］　鐔がなく、鞘の口金と柄の縁金が接触するように作られた拵。短刀拵や腰刀拵に多く見られる。

藍鮫皮［あいざめがわ］　鞘や柄の装飾に使われる鮫皮のひとつ。藍鮫はツノザメ科に属する小形のサメの総称で、薄藍色の皮が特徴。海軍の軍刀拵によく用いられた。

相槌・相鎚［あいづち］　鍛冶で、師匠と弟子が金敷に相対して交互に鎚を打ち下ろすこと。合槌とも。相手の調子に合わせる意味の「相槌を打つ」の語源。

葵形鐔［あおいがたつば］　鐔の形のひとつで、4枚の葵の葉を木瓜形に組み合わせた形状。兵仗用の太刀鐔として平安時代の毛抜形太刀から江戸時代の糸巻太刀まで長く用いられた。

葵拵［あおいこしらえ］　葵紋で意匠を統一した拵。徳川の差料などに見られる。

葵紋［あおいもん］　フタバアオイの葉の意匠の紋。徳川家の家紋・三つ葉葵が有名。江戸初期の刀工・越前康継は、徳川家の御用鍛冶として、茎に葵紋を切ることを許された。

葵紋〈越前康継作の脇指（骨喰藤四郎写）〉A

青江［あおえ］　鎌倉時代初期から南北朝時代に備中国青江（岡山県倉敷市）で隆盛した刀工一派。後鳥羽上皇の番鍛冶にも選出される。守次、貞次、恒次など「次」字が付く刀工が多い。

青江帽子［あおえぼうし］　青江派の作に見られる帽子の特徴。直刃の刃文が棟側に傾くようにたるみ、先が尖って返る。

青貝［あおがい］　ユキノカサガイ科の巻き貝の総称。刀の鞘や槍、薙刀の柄などの装飾に用いられる。殻の内側が光沢のある青緑色で、青貝を砕いてちりばめ、漆で塗りこんでから、つややかに磨き出した鞘塗りを青貝微塵塗といい、満点の星空のように華やかな意匠で江戸期に流行した。

青金［あおきん・あおがね］　①金に20％程度の銀を混ぜた合金。青みを帯びた金色になり、刀装具に使用される。②鉛の別称。

竹刀［あおびえ］　青竹で作った小刀。かつては竹刀でへその緒を切る風習が各地で見られ、『日本書紀』には、木花開耶姫命がへその緒を竹刀で切ったという記述がある。

障泥形鐔［あおりがたつば・しょうでいがたつば］　馬の胴にかぶせる障泥（泥よけ）に似た台形の鐔。

赤鰯［あかいわし］　赤く錆びついた刀を、塩漬けにして赤くなった鰯にたとえあざけっていう語。なまくら刀、またはそれを持つ浪人の比喩に使われる。

赤木柄［あかぎつか］　紫檀、蘇芳など赤みを帯びた熱帯産の堅木を用いた柄。曾我五郎時致所持と伝える箱根神社所蔵の赤木柄短刀（重要文化財）が有名。

赤金［あかきん］　金に25～50％の銅を含む合金。赤みを帯び、刀装具に使用される。銀を含むものは青金という。

赤坂鐔［あかさかつば］　江戸時代に江戸・赤坂を本拠地とした鐔工集団。寛永年間（1624～44）に京の鐔商・雁金屋彦兵衛が鐔工の忠正父子と江戸赤坂に移り住んだことに端を発す。京透と尾張透を基調に、洒脱な作風で一世を風靡した。

赤坂鐔〈赤坂忠重作「八橋透図鐔」〉D

赤羽刀［あかばねとう］　第二次世界大戦の終結直後にGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）に没収された刀剣類のうち、東京・赤羽の米陸軍第八軍兵器補給廠に保管されたもの。約5000振りが返還になり、所有者が判明したものは後に返却されたが、大多数は東京国立博物館で保管されていた。平成7（1995）年、「接収刀剣類の処理に関する法律」に基づき、全国の公立博物館等に無償譲与して公開、活用されている。

上太刀［あがりだち］　献上用の模造刀で、江戸時代に年始などの祝儀に、大名らが将軍に献上した。大名間や民間でも同様の用途で使用され、その後、廃品業者に払い下げ、再び客に販売された。

足［あし］　①刃中の働きのひとつ。刃縁から刃先に向かって沸や匂が線状に伸びる模様。丁子刃によく見られる。②目貫の裏側にある突起部分で、目貫がずれるのを防ぐため、足を柄に差し込む。

足緒［あしお］　帯執

足金物〈鎌倉時代の太刀〉A

足金物［あしかなもの］　太刀拵の金具のひとつ。太刀拵の中程2カ所に装着され、太刀緒（佩緒）と鞘をつなぐ。バランスよく太刀を固定させ、腰に吊るす役割がある。足金とも。

足金［あしがね］　足金物

足革［あしかわ］　足緒

足長丁子［あしながちょうじ］　刃文の名称のひとつ。足が刃先の方まで長く入った丁子刃。鎌倉時代の一文字派や、新刀、新々刀に多い。

足間［あしま（あしあい）］　太刀拵で、一の足と二の足の間を指す。

当たり［あたり］　①入札鑑定において、刀工名を的中させた場合の評価。②鞘の内部が刀身に触れる鞘当たりのこと。錆の原因となる。

後樋［あとび］　持ち主の好みなどで製作時ではなく、後世に施された樋。

後彫［あとぼり］　持ち主の好みなどで製作時ではなく、後世に施された彫刻。

後銘［あとめい］　作者の刀工ではなく、後世の人間が入れた銘。試し切り銘や所持銘などがある。

二ツ胴［ふたつどう］　試し斬りの手法のひとつ。罪人の死体を二つ重ねて、胴の部分をまとめて斬ること。重ねる死体の数が増えると三ツ胴、四ツ胴となる。

二所物［ふたところもの］　目貫・笄・小柄のうち二つが同一の作者、同一の画題などで揃っているもの。

普段差し［ふだんざし］　日常的に腰に差す刀のこと。

縁［ふち］　刀装具のひとつ。主に打刀拵の様式で、柄の補強のために、鐔に接する口の部分に取り付ける金具。先端に付けた「頭」と合わせて縁頭と称し、鑑賞や収集の対象となるような凝ったものも多い。

縁頭［ふちがしら］　柄の口に付けた「縁」と先端に付けた「頭」と合わせて称した言葉。共に柄木を留めて保護する役割があり、対の意匠となることもある。

二所物〈横谷宗珉「二王図二所物」〉B

縁取透し［ふちどりすかし］　図柄の周囲を縁取るように施した透彫。

普通形［ふつうがた］　茎の形状のひとつ。古刀から新刀全般に見られる。刃と棟をそのまま延長し、ゆるい直線でつないだような形状である。

復古刀［ふっことう］　幕末、水心子正秀や弟子の南海太郎朝尊によって提唱された、古い時代の刀を目標として作刀研究する動き。また、その刀。鑑賞刀の趣を強めていた江戸時代後期に、実際の戦闘に使える刀の復活を唱えた。復古新刀とも。

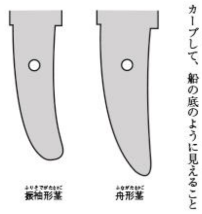
不動明王［ふどうみょうおう］　戦勝を司る仏。敵国退散の守護神で、刀身に彫刻された。不動明王が持つ龍が巻きついた倶利伽羅剣、不動明王を表す梵字「カーン」、護摩箸など、不動明王に関わる図案は刀身彫の代表的なもの。

縁頭〈後藤一乗作「こぼれ松図縁頭」〉A

不動明王

懐刀［ふところがたな］　懐に隠し持って持ち歩く護身用の短刀。懐剣。転じて、秘密を共有する有能な腹心の部下を指す。

舟形茎［ふながたなかご］　茎の形状のひとつ。棟側は直線的だが、刃側が緩やかにカーブして、船の底のように見えることから。先は剣形になる。身幅が広めの刀に使われることが多い。南北朝時代以降の相州の刀に多いため、相伝茎とも呼ばれる。


舟形茎　振袖形茎

舟底茎［ふなぞこなかご］　舟形茎

踏まえ木［ふまえぎ］　刀を研ぐ時に、砥石を抑えるために使う湾曲した木製の道具。平仮名の「へ」のような形で、両足で押えて、自身の体重で砥石が動かないようにする。

振袖形茎［ふりそでがたなかご］　茎の形状のひとつ。着物の振袖のように、茎が中ほどから棟側に反る形状。鎌倉時代の細身の短刀に多い。

古袈裟［ふるげさ］　斬れ味のよさを示す截断銘として茎に切られた言葉。古い袈裟は繊維がもろく切れやすいことに由来。

古釣瓶［ふるつるべ］　斬れ味のよさを示す截断銘として茎に切られた言葉。古い釣瓶には水を溜めることができないことから、水滴も溜まらないほどの鋭い斬れ味を示す。

文化財保護法［ぶんかざいほごほう］　昭和24（1949）年1月26日の火災で法隆寺金堂壁画が焼損したことをきっかけに、文化の保存と継承を目的として翌年に文部省（現在の文部科学省）が定めた法律。建造物や美術品、考古資料などの有形文化財と、伝統技法などの無形文化財の両方を保護する目的がある。国宝や重要文化財の指定や保護、公開や活用に関する事項も明記される。

分銅形鐔［ふんどうがたつば］　鐔の形状のひとつ。円柱や角柱に近い形で、彫刻などの装飾が施された重厚な鐔。主に飾太刀や細太刀などの儀仗の太刀拵に付随する。唐鐔。

踏張り［ふんばり］　刀の形状を指す言葉。柄に近い元幅が広く、切先に近づくにつれて著しく狭まる形状。平安時代末期から鎌倉時代初期の腰反りの高い生ぶの太刀姿によく使われる表現。足元の幅が広

【書誌情報】
書名：ビジュアル刀剣用語事典
仕様：A5 判　160 ページ
定価：2200 円（本体 2000＋税 10%）
発売日：2022 年 9 月 20 日

全国書店、オンライン書店の Amazon などで発売中。
https://amzn.to/3Ug7DCW

【株式会社天夢人】 https://www.temjin-g.co.jp
2007 年設立。隔月刊雑誌『旅と鉄道（奇数月 21 日発売）』をはじめとする、鉄道・旅・歴史・民俗・カルチャーをテーマとした雑誌や書籍を発行し、人生を豊かにするための情報を発信しています。

【インプレスグループ】 https://www.impressholdings.com/
株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社天夢人　　担当：野口
Tel: 03-6837-4680 / E-mail: info@temjin-g.co.jp
URL：https://www.temjin-g.co.jp